

旧石器時代の洞穴遺跡に関する調査研究および 保護活用をめぐる海外調査報告

山崎真治

A visiting report on the investigation, protection and utilization of
overseas Palaeolithic cave sites.

Shinji YAMASAKI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第12号別刷

2019年3月29日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.12

March, 2019

旧石器時代の洞穴遺跡に関する調査研究および 保護活用をめぐる海外調査報告

山崎真治¹⁾

A visiting report on the investigation, protection and utilization of
overseas Palaeolithic cave sites.

Shinji YAMASAKI

1 はじめに

筆者は、沖縄県南城市サキタリ洞遺跡(ガンガラーの谷内)の調査研究事業(沖縄県立博物館・美術館2018)^(註1)の一環として、国内外の洞穴遺跡の調査および保護・活用状況を実地に検分する機会を得た。

その内容の一部については、すでに報告したところであるが(山崎2015・2016)、本稿ではいくつかの遺跡に関する情報を追加し、洞穴と人類活動との関わり、および洞穴遺跡の調査と保護、活用をめぐる状況について紹介し、広く情報共有をはかりたいと思う。表1に本稿で言及する遺跡のリストを示す。

各遺跡の訪問、踏査にあたっては、藤田祐樹、片桐千亜紀(沖縄県立博物館・美術館:当時)、海部陽介(国立科学博物館)をはじめとする多くの方々

にご協力ならびに情報提供をいただくとともに、現地においても様々な形でお世話になった。個別にお名前を記すことができないが、この場を借りて厚く感謝申し上げたい。

2 八仙洞遺跡

八仙洞遺跡は、台湾東海岸の台東県長濱郷に位置する海食洞穴群からなり、台湾の後期更新世～完新世前葉の長濱文化を代表する遺跡である。八仙洞遺跡付近の地質は、中新世の火山活動に由来する火山角礫岩層を基盤とし、活発な隆起活動に伴って、海岸線に形成された海食洞穴が順次上方に押し上げられ、今日見る洞穴群が形成されたものである。したがって、標高の高い位置にある洞穴ほど形成時期が古いとされ、標高約60mに位置する永安洞よりも上方に位置する崑崙洞や潮辰洞などでは、後期更新

表1 本稿で取り上げる遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地		年代	訪問年
1	八仙洞遺跡	台湾	台東県	旧石器時代	2009
2	ドゥ・サン遺跡	ベトナム	ホアビン省	旧石器時代～中石器時代	2014
3	ソム・チャイ洞穴	ベトナム	ホアビン省	旧石器時代	2014
4	リアン・ブア遺跡	インドネシア	フローレス島	旧石器時代～新石器時代	2013
5	丹陽金窟(クムグル)	韓国	忠清北道	旧石器時代～青銅器時代	2016
6	ヴェゼール渓谷 (クロマニヨン岩陰、アブリ・パ トー、ロージェリー・バス)	フランス	レゼジー	旧石器時代	2016
7	ネアンデルタール	ドイツ	ノルトライン＝ヴェスト ファーレン州	旧石器時代	2017
8	シュヴァーベン・ジュラ(ガイ センクレスターレ、ホーレ・フェ ルス)	ドイツ	バーデン＝ヴュルテンベ ルク州	旧石器時代	2017

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

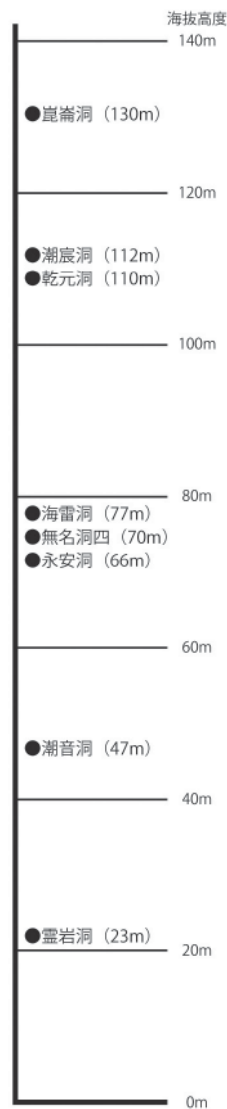


図1 八仙洞遺跡の洞穴群の高度分布

世（旧石器時代）の文化層が確認されている。

八仙洞の現地は、急峻な崖面にレベル差をもって点在する洞穴群からなり（図1）、各洞穴をめぐる散策路が整備されている。洞穴群自体は限られた範囲に集中しているので、遺跡の分布としてはかなり高密度という印象である。

2008～2011年には、中央研究院歴史語言研究所による新たな発掘調査が行われ、更新世から完新世前葉に至る文化内容の詳細が明らかにされている（中央研究院歴史語言研究所2009、2011）。特に無名洞四では、旧石器時代文化層（約20,000年前）から2ヶ所の炉址が検出されており、多数の石器、

動物骨、魚骨が得られている。陸獣だけでなく、魚骨も得られていることから、当時海岸に面したこの遺跡では水産資源も利用されていたことがわかる。また、炉址が検出されたことも重要で、この場所で火を用いた人類活動が行われていたことを示す。なお、八仙洞では旧石器時代の人骨は検出されていないが、成功小馬海蝕洞では、完新世前葉の埋葬人骨が検出されている。

石器は、主に遺跡前面の海岸部で入手可能な変質砂岩や火山岩（玄武岩質安山岩、安山岩など）の円礫を素材としており、大型の礫器（石核も含まれる）や礫皮付剥片が主体を占め、その他に小型の剥片類や石英質石材を用いた剥片石器類も見られる。

洞穴内の堆積物は、当時の海浜部から運ばれた砂礫や、水流によって運ばれた土砂、崖錐堆積物などからなるようである。上述の無名洞四では、地表から旧石器時代文化層までの深さは2～3 mに達し、岩盤までは4～5 mに及ぶ。

筆者が訪問した際には、八仙洞の各洞穴には宗教施設が設置されており、遺跡については各洞穴に簡単な案内板が設置されている程度であったが、その後宗教施設の立ち退きが決定し、遺跡の保護と整備が進められているとのことである。遺跡近隣に展示施設はないが、台東市内にある国立台湾史前文化博物館には、八仙洞遺跡や長濱文化に関する詳しい展示が設けられている。

3 ホアビン文化の洞穴遺跡

ベトナム北部のホアビン文化は、東南アジアの旧石器・中石器文化の中で最も良く知られた文化である。長濱文化同様、後期更新世（約20,000年前）から完新世前葉（約8,000年前）にわたって継続したことが知られている。最近では、MIS（海洋酸素同位体ステージ）3に遡る古い遺跡も確認されているようである。

ホアビン文化の遺跡は、主にベトナム北部、ハノイの南西内陸部にあたるホアビン省周辺に分布し、石灰岩山塊の洞穴内に、淡水産巻貝からなる大規模な貝層が残されている。スマトラ・リスやショート・アックス、ディスコイドなどと呼ばれる礫器類が顕著に見られ、類似の文化は、東南アジア大陸部に広く分布する。以下では筆者が現地を訪れることがで

きたドゥ・サン遺跡およびソム・チャイ洞穴について、概要を述べる。

熱帯カルスト地形が広がるホアビン山塊に位置するドゥ・サン遺跡は、急峻な山々に取り囲まれた盆地状の沖積地に面したいわゆる岩陰遺跡で、周辺の水田面からは数mほど高まった位置にある。岩陰の天井部や壁面には二次生成物が発達しており、かつてこの岩陰が閉鎖的な洞穴空間であったこと、そして洞穴の崩壊によって現在のようなオープンな岩陰が形成されたことが示唆される。岩陰の前面はよく開けており、岩陰前面から奥部にかけて、淡水産巻貝（カワニナの仲間）からなる厚さ1～2mほどの厚い貝層が分布する。年代測定は行われていないが、調査者のグエン・ヴェト氏によれば、動植物相から下層が更新世末期、上層が完新世前葉のホアビン文化層であるとのことであった。

ソム・チャイ洞穴は、規模の大きな盆地状の沖積地の中に屹立したカルスト残丘の中腹に位置する洞穴遺跡で、周囲の平坦地からはやや高まった場所があり、遺跡からは周囲の地形を見渡すことができる。遺跡へのアプローチにはゲートが設けられ、管理が行われているほか、洞穴部分には手すりや模型も設置され、教育普及にも活用されているようである。

洞穴の全体形は袋状を呈し、開口部から洞内に向かって落ち込んだ形態となっており、前庭部は発達していない。洞穴内には淡水産巻貝（カワニナの仲間）からなる非常に大規模な貝層が残されており、貝層の厚さは発掘以前に土取りによって除去された部分も含めると5mに達する。これらはほとんど純貝層と言って良い状態であるので、堆積の主な要因は人為的な廃棄ということになる。発掘によって、7,000点以上の石核石器、100,000点以上の剥片類が出土しており、埋葬人骨も検出されている。膨大な石器の材料となった玄武岩の円礫は、遺跡近隣で容易に入手できるものである。堆積層中のサンプルからは、22,000～19,000年前にかけての30件近くの放射性炭素年代値が得られており、MIS2の最終氷期最盛期に形成されたものと考えられる。この遺跡からは、円礫の一端に研磨によって刃部を作り出したいわゆる礫斧が多数出土しており、注目される。

4 リアン・ブア遺跡

ウォーレス線の東に位置するインドネシア・フローレス島のリアン・ブア遺跡は、フローレス原人（ホモ・フロレシエンシス）の発見地としてよく知られている。遺跡は、フローレス島西部マンガライ地方の町ルテンから、北へ14kmの場所にあり、標高は約500mをはかる。洞穴は、中新世の石灰岩層中に形成されており、ワエ・ラカン川が刻んだ谷に面している。リアン・ブア遺跡の前面にはなだらかな段丘地形が広がり、周辺にはのどかな田園風景がみられる。こうした景観は、90万年前以降の中期更新世の石器や動物化石が検出されたことで知られるフローレス島中央部ヌサ・テンガラ地方のソア盆地とは大きく異なっている。

洞穴の開口部の幅は約30m、天井までの高さは約25m、奥行きは約40mで、天井や壁面には二次生成物が発達している。形態的には前室部（フロント・チャンバー）と後室部（リア・チャンバー）の二つの空間が連なって大きな空間が形成されている。元来は地表下で形成された洞穴が、河川の浸食によって壁面部が開口したもので、現在洞内に水流はなく、洞床は平坦で、快適なシェルターとなっている。

遺跡の堆積物は、水の作用によって運搬された土砂や火山噴火に伴う火砕物などからなる。洞穴の前室部では、10m以上に及ぶ厚い堆積物が確認されており、土留めのための擁壁を駆使しつつ、堆積層を深く掘り進む特殊な発掘が行われた。その結果、2～4mに及ぶ完新世の堆積層下に位置する火山性堆積物のさらに下位、地表下約6mの地点からフローレス原人の全身骨格（LB1）が発見されている。付近からは炉址とされるものも検出されているようである。人骨の年代は約5万年前とされている。出土した石器はチャートや石灰岩からなり、遺跡前面の河川で入手可能なようである。剥片類には5cm以下の小型のものが多く見られ、精巧である。

遺跡へのアプローチにはゲートが設置されており、遺跡に隣接してコンパクトな展示施設も設けられていた。パネルやレプリカを用いて、発掘調査の概要が詳しく紹介されていた。ガイド同伴での見学が原則のようである。センセーショナルな発見の現場でもあり、フローレス島のガイドブックにも取り

上げられるほど著名な遺跡となっている。

5 丹陽金窟（クムグル）

韓国忠清北道丹陽郡はソウルの南西約140kmの内陸部に位置し、韓国の旧石器時代を代表するスヤンゲ遺跡の所在地として著名である。この周辺には石灰岩が広く分布しており、洞穴遺跡も多く知られている。丹陽金窟は丹陽市街地の北に位置する石灰岩洞穴遺跡で、南漢江に面した崖面に開口している。洞口は幅10m、高さ8mと大規模で、洞口付近では二次生成物の発達が悪い。1980年代に行われた発掘調査の結果、前期～後期旧石器時代の文化層が確認された。

遺跡前面の河床と洞口の比高差は数m程度と低く、洞床の堆積物は主にシルトからなり、堆積物の形成には洞外からの吹き込みや水流による運搬が影響しているものと思われる。遺跡前面の川原には、石英や頁岩といった石器石材として利用可能な転石が多く分布している。

訪問が冬季であったため、河川が結氷していたこと、遺跡踏査中に茂みからシカが飛び出してきたことが印象的であった。現在この地域にはかなりの数のシカが生息しているようである。

スヤンゲ遺跡も金窟と同じ南漢江の川筋（丹陽市街を隔てて8kmほど下流側）に位置しており、当時の人々はこうした山間部の河川流域を活発に利用していたと考えられる。石材の獲得や狩猟活動との関わりも想定されるが、河川の漁労や水産資源利用と

の関わりについても検討の余地があるように思われる。

金窟の周囲は原野で、訪問時には遺跡近隣で橋梁の工事が進んでいた。遺跡までのアプローチは悪いが、遺跡近傍には説明板が設置されていた。近隣のスヤンゲ遺跡には遺跡展示館が整備されており、スヤンゲ遺跡をはじめ、金窟など近隣の洞穴遺跡から出土した動物骨等の実物資料も展示されている。

6 ヴェゼール溪谷の洞穴・岩陰遺跡

フランス・ドルドーニュ県に位置する世界遺産「ヴェゼール溪谷の先史的景観と装飾洞窟群（Pre-historic Sites and Decorated Caves of the Vézère Valley）」は、著名な装飾洞穴であるラスコーをはじめとする数多くの旧石器時代遺跡からなる。この地域の洞穴遺跡の発掘調査と研究は、今日の旧石器時代研究の礎となったものでもあり、世界的に見ても洞穴遺跡調査の先進地域の一つとなっているだけでなく、現在も新たな調査研究が続けられている。各遺跡へのアクセスの起点となるレゼジーの町は、中世の街並みを残すリゾート地でもあり、多くの旧石器コレクションを有する国立先史学博物館が所在していることから、遺跡を活用した観光もさかんである。

この地域の洞穴遺跡には生活遺跡と壁画をもつ装飾洞穴があるが、以下では筆者が現地を訪れることができたレゼジー近辺の生活遺跡の事例について紹介する。

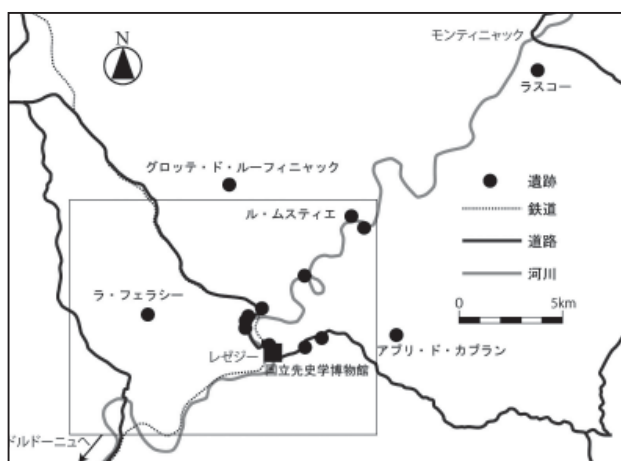


図2 ヴェゼール溪谷の遺跡群



クロマニヨン岩陰

クロマニヨン岩陰（アブリ・クロマニヨン）は、レゼジーの駅に近接したヴェゼール川左岸の断崖の下部に形成された岩陰遺跡である。遺跡に隣接して著名な「ホテル・クロマニヨン」があり、レストランも併設されている。遺跡の前面には博物館（料金制）が設置されており、岩陰から発見された人骨や出土品に関する展示を見学することができる。クロマニヨン人の復元模型や、3D映像を駆使した旧石器時代の再現映像は見ごたえがあり、遺跡の調査史に関する展示も設けられていた。遺跡部分には人骨レプリカを用いた埋葬人骨の再現や、革張りの囲いをもつ住居が再現されており、背後の断崖には散策路が設けられている。崖上からの渓谷の眺望は素晴らしい。

この遺跡は、1868年、鉄道敷設に際して崖下に堆積した厚さ数mに及ぶ岩屑が掘り返された際に発見された。当初、遺跡の主体部である岩陰部分は完全に埋没しており、その存在すら気づかれていなかったが、掘削によって保存の良い3体分の埋葬人骨が発見された。発見された人骨の実物は、次項で取り上げるアブリ・パトーの人骨とともに、パリの人類学博物館に展示されている。

遺跡は、白亜紀（Coniacian：約9,000万年前）に形成された石灰岩のノッチ部分に形成されている。このノッチは水平方向に連続性が良く、石灰岩の層理に沿って形成されている。レゼジー周辺の石灰岩の層理は、ほぼ水平方向に発達しており、断層で切れ切れとなって傾動した日本の石灰岩地帯の状況とはかなり異なった印象である。また、石灰岩自体も結晶質で堅緻である。レゼジー周辺の石灰岩には、こうしたノッチが至るところに発達しており、後述するアブリ・パトーやロージェリー・バスも同様にノッチ部分に形成された遺跡である。ノッチの形成要因についてはいろいろな説があるようだが、地層ごとに周氷河作用による風化の進行程度に違いが生じたために形成されたというのが納得しやすい説明と思われた。ただし、現在のノッチ部分の表面は一般に滑らかである。

アブリ・パトー

かつて遺跡の上に住居を構えていたパトーとい

う名の人物によって発見されたことから、アブリ・パトー（パトーの岩陰）と呼ばれている。1958～1964年にかけてハーバード大学のハラム・L・モヴィウスによって調査が行われた著名な岩陰遺跡である。ムステリアンからソリュートレアンにかけての多層位遺跡で、人骨（グラベッティアン）や石灰岩に彫刻されたヴィーナス像の発見で知られる。出土品の一部は隣接する展示施設で公開されている。遺跡を見学するためには、ガイドツアー（料金制）に参加する必要がある。ツアーへの申し込みは現地の管理事務所で行うことができる。

遺跡は、レゼジーの町の背後にそびえる断崖の下部にある。この遺跡は発掘坑と地層断面およびグリッド・システムがそのままの状態で作成されており、遺跡の状況を間近に見ることができる。現在も時折調査が行われているようである。堆積層の状況は、後述するロージェリー・バスと同様に、おびただしい岩屑からなり、地層断面では、水平方向に連続性の良い地層が重畳しているのが観察できた。大規模な落盤層も認められ、時代を追って遺跡上部の岩底は次第に後退していったようである。こうした立地にある岩陰は、氷雪の緩む春先には生活に不向きな場所となったと考えられるが、最終氷期最寒冷期前後のヴェゼール渓谷の遺跡では、トナカイ狩猟が活発におこなわれていたようであり、季節的な岩陰利用が行われていたようである。

この場所からは14ヶ所の炉址が検出されており、地層断面にも所々に炭化物層や灰層が認められた。発掘坑の基底部は基盤岩に到達しており、その上を厚さ9mに達する堆積物が覆っている。基盤岩の上面のレベルは岩陰奥部で高く、岩陰外側に向かって傾斜している。しかし、基盤岩を覆う堆積物は比較的レベルに近く堆積しており、堆積開始初期の段階で、岩陰部にはかなり大きな平坦面がすでに存在していたように思える。またかなり大きな崩落岩も、転動せずに下位の地層を覆うような格好で堆積しており、沖縄の洞穴遺跡の堆積物とはかなり異なる印象を受けた。この地域の岩陰遺跡の堆積物の主な由来は、周氷河作用によって発生する岩屑と見られるが、こうした寒冷で乾燥した地域における洞穴遺跡の堆積プロセスと、沖縄のように温暖湿潤な地域の洞穴遺跡の堆積プロセスには、大きな違いがあるという

ことなのかも知れない。

ロージェリー・バス

ヴェゼール川右岸に位置するマグダレニアンの代表的な遺跡で、下流側にはグラン・アプリ（中世以降の改変で堆積物は失われていた）、アプリ・ド・ポワソン、上流側にはロージェリー・ハウテといった岩陰遺跡が連なっている。レゼジーの市街地から2kmほどの場所にあり、徒歩で往復可能である。グラン・ロックと呼ばれる鍾乳洞（地質学的サイト）が隣接しており、ともに管理事務所でチケットを購入して見学することができる。遺跡に隣接してシアターがあり、遺跡の環境や研究史を紹介する映像が見られるほか、出土品の展示も行われていた。この遺跡は、600点にのぼるポータブル・アートの発見で知られ、精巧な作品の数々は見ごたえがある。

遺跡は大規模な岩陰部に形成されており、main abriとabri marseillesと呼ばれる二つの地点からなる。岩陰の奥行きは約15mに達し、岩陰内には湧水もある。発掘された地層の断面が見学できるようになっており、堆積物はアプリ・パトーと同様に主に岩屑からなる。堆積層は水平方向に連続性の良い地層が何枚も積み重なっており、層位区分は明瞭である。マグダレニアン層の上部では、大規模な岩底の崩壊が生じ、巨大な落盤塊が見られる。堆積層中にはおびただしい数のフリント製石器や動物骨が密集した状態で含まれており、炭化物や焼土の集中部も見られた。日本で言うと、縄文時代の岩陰遺跡の堆積層のような状況である。打製石器に利用される良質なフリントは、レゼジーの川原では採集できず（quartziteの円礫は採集できるようであったが、これは炉址などに利用されているようである）、遠方から搬入されたものである。岩陰の外側では地層や動物骨の保存は悪いようであった。岩陰出口の通路部では、現在も発掘調査が行われており、新鮮な断面に層序を示すラベルが取り付けられていたのが印象的であった。

7 ネアンデルタール

ドイツのデュッセルドルフ郊外に位置する。ネアンデルタール人の模式標本の発見地として著名である。かつては風光明媚な溪谷であったが、19世紀

以降の近代化に伴って一帯の石灰岩の工業資源としての採掘が活発化し、ネアンデルタール人の発見地である小フェルトホーファー洞窟をはじめ、谷の中に多数存在した洞穴は採石によって失われてしまった。しかしその後、1997年にライン州立博物館の研究者によって、ネアンデルタールの模式標本に接合する人骨が奇跡的に発見され、洞穴の所在地が特定されたことはよく知られている。

小フェルトホーファー洞窟の跡地にはモニュメントや標柱が整備されており、デュッセルドルフからほど近く、交通の便が良いこともあって、多くの人々が訪れる観光地となっている。遺跡に隣接して博物館も整備されており、ネアンデルタール人の発見・再発見をめぐるエピソードが詳しく紹介されているほか、人類進化史を復元模型や象徴的なオブジェでたどる斬新な展示が見物となっている。現在遺跡周辺は植生が回復して、往時の面影を取り戻しつつあるように見えるが、石灰岩の採掘は現在でも続いており、地域の重要な工業資源となっている。

8 南ドイツの洞穴遺跡

南ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州には、後期旧石器時代（オーリナシアン）の4万3000～3万3000年前のヴィーナス像や「ライオン・マン」、フルートなどの芸術作品を出土する洞穴遺跡が分布しており、2017年には「シュヴァーベン・ジュラにおける洞窟群と氷河時代の芸術（Caves and Ice Age Art in the Swabian Jura）」として世界遺産に登録された。この世界遺産はLonetal（Lone谷）とAchtal（Ach谷）に分布する6ヶ所の洞穴遺跡から

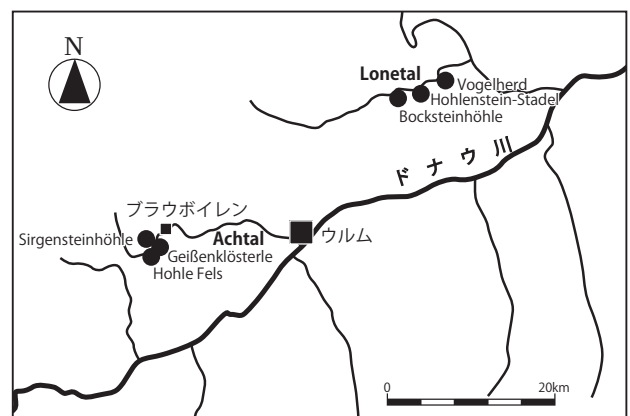


図3 シュヴァーベン・ジュラの洞窟遺跡群

なり、このうちAchtalにあるガイセンクレスターレ（Geißenklösterle）とホーレ・フェルス（Hohle Fels）の現地を訪れることができた。

両遺跡は、ウルム近郊の町ブラウボーレンとシェルクリンゲン間に位置し、遺跡をめぐるサイクリングコースも整備されている。ブラウボーレンには近隣の遺跡の出土品を集めた博物館もあり、芸術作品の実物も多く展示されている。このほか、ウルム博物館やヴュルテンベルク州立博物館（シュトゥットガルト）にも関連した展示が設けられている。現在のAch川は小川程度の流れであるが、谷幅は広く、兩岸の崖線部には洞穴遺跡が点在している。Ach谷の周辺には、果樹園や畑地からなるのどかな風景が広がっており、人工的な構造物も少なく、自然に親しめる景観が維持されているのが印象的であった。

ガイセンクレスターレは、谷底から急峻な斜面を数十mほど登った場所にあり、かなり険しい立地で、アプローチは悪い。洞穴遺跡としては小規模なもので、前庭部も発達していない。堆積物は主に岩屑からなるようである。開口部には保護のための柵が設けられていた。遺跡の麓には駐輪場と案内板が整備されており、夏季に訪問したこともあって訪れる人も多かったが、遺跡まで登る人は限られるようであった。

ホーレ・フェルスは、ガイセンクレスターレの近傍に位置し、この地域では最も大規模な洞穴遺跡である。谷斜面の裾部に屹立した石灰岩塊の基部に開口しており、アプローチも容易である。洞穴は開口部から続く長さ15mの通路と、その奥のメイン・ホールからなり、発掘は主に通路の後方部分で行われている。洞穴は通常は閉鎖されているが、夏季には一般に開放されており（料金制）、訪問時には内部も見学することができた。開口部内の通路前方部には、レプリカやパネル等の展示もあり、多くの一般来訪者が興味深そうに見学していた。開口部が小さく閉鎖的な洞穴であるため、外気に比べて内部は非常に涼しく感じられた。通路、ホールとも二次生成物の発達が悪く、洞床には崩落岩や岩屑が多く見られた。発掘は通路後方部分を全面的に掘り下げる形で行われており、ホールへのアプローチのために金属製の橋梁が架設されていた。発掘区内は4mほどの深さまで掘り下げられており、中期旧石器時代

（ムステリアン）、後期旧石器時代（オーリナシアン、グラベッティアン、マグダレニアン）の堆積層が確認されている。発掘区の底面は土嚢で覆われていたので、直接堆積物を観察することはできなかった。遺跡近傍のシェルクリンゲンは小さな町であるが、遺跡には多くの見学者が詰めかけており、遺跡に対する関心の高さがうかがえた。

小結

以上、筆者が訪問できた旧石器時代の洞穴遺跡について簡単に紹介した。一口に旧石器時代の洞穴遺跡と言っても、多様な環境下で実にさまざまな形態・内容の洞穴遺跡があることがわかる。類似した環境下にあっても、堆積環境や形成過程には個性があり、遺跡に即した調査研究と解釈が求められることになろう。遺跡の保護や活用についても、それぞれに取り組まれているところであるが、観光資源としての積極的な活用は目立つところである。特に、多数の遺跡を擁しつつ、調査と観光を両立させているフランスやドイツの事例は興味深い。また、こうした洞穴遺跡には堆積物が非常に厚く深いものが多く、調査の安全性をいかに確保するかという点も大きな課題である。

各地の事例に学びつつ、沖縄の洞穴遺跡の調査研究と保護活用の進展をはかっていきたい。

註

（註1）2012～2017年度は沖縄振興特別推進交付金事業「沖縄遺産のブランド開発・発信事業」として実施。

参考文献

- 沖縄県立博物館・美術館 2018『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 山崎真治 2015「旧石器時代の洞穴遺跡－台湾・東南アジア・沖縄の事例から－」『九州旧石器』19
- 山崎真治 2016「遺跡紹介：フランス・ヴェゼール溪谷の旧石器時代遺跡」『九州旧石器』20



写真1 八仙洞遺跡（台湾）の遠景
写真中央の崖面に洞穴群がある。



写真2 八仙洞遺跡の崑崙洞の近景



写真3 ドゥ・サン遺跡（ベトナム）の近景



写真4 ソム・チャイ洞穴（ベトナム）の遠景
写真中央の岩丘中腹に洞穴がある。



写真5 ソム・チャイ洞穴の近景



写真6 リアン・プア遺跡（インドネシア）の近景
大規模なホールからなる。



写真7 リアン・ブア遺跡の全景



写真8 リアン・ブア遺跡前面の田園地帯



写真9 スヤンゲ遺跡（韓国）の近景
冬季で川面が結氷している。



写真10 丹陽金窟（韓国）の遠景
南漢江に面して開口している。



写真11 ヴェゼール溪谷（フランス）の景観



写真12 クロマニヨン岩陰の近景



写真13 アブリ・パトーの遠景
写真中央の覆屋部分が発掘区。



写真14 アブリ・パトーの発掘地点



写真15 ローゼリー・バスの外観



写真16 ローゼリー・バスの堆積層断面



写真17 ネアンデルタール人骨発見地点（ドイツ）の近景
小フェルトホーファー洞窟の跡地。



写真18 Ach谷（ドイツ）の景観



写真19 ガイセンクレスターレの外観
写真中央左の金網部分が洞口。



写真20 ホーレ・フェルスの外観
写真中央の岩塊下部に開口する。



写真21 ホーレ・フェルスの調査区
メイン・ホールに続く通路部分。

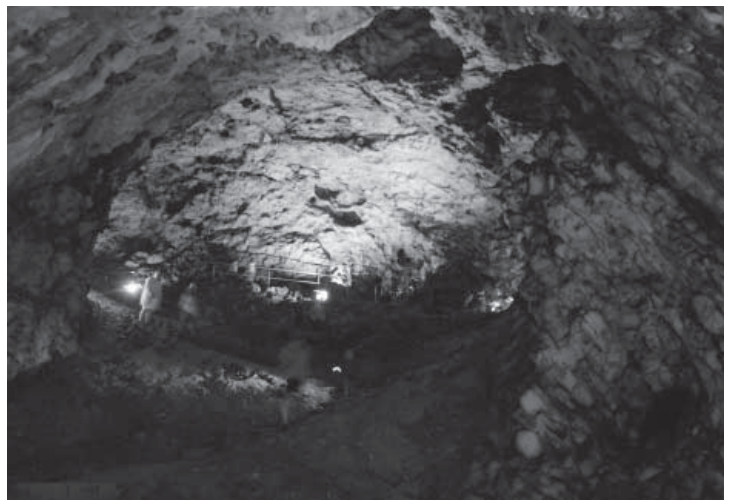


写真22 ホーレ・フェルスのメイン・ホール

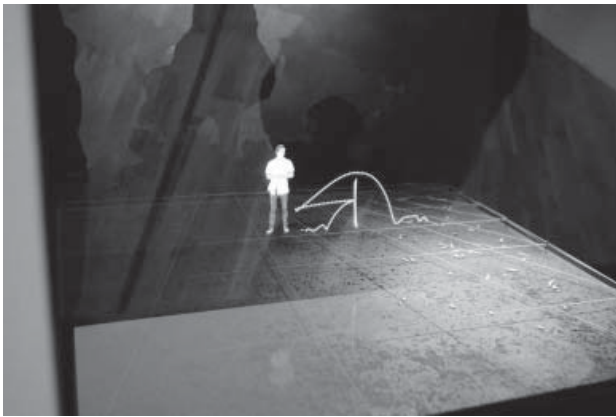


写真23 人類学博物館（パリ）の展示（1）
パンスヴァン遺跡の考古学的解釈に関する3D映像展示

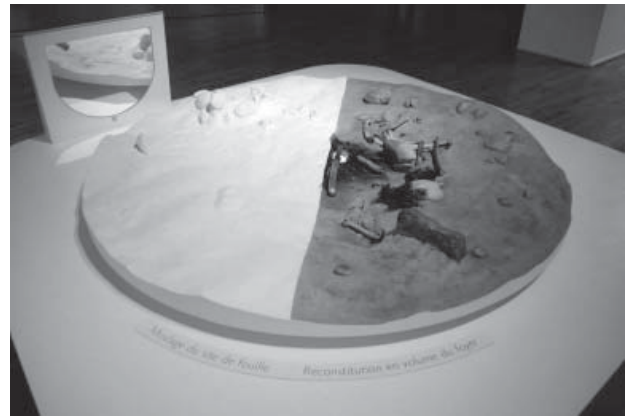


写真24 人類学博物館（パリ）の展示（2）
遺物出土状況模型（左）と復元模型（右）



写真25 人類学博物館（パリ）の展示（3）
世界の言語（壁面の舌を引くと言語の音声が出る）



写真26 国立先史学博物館（レゼジー）の外観
岩山の中腹に建つ中世の建物を利用している。



写真27 国立先史学博物館（レゼジー）の展示（1）
トゥルカナ・ボーイの模型が出迎えてくれる



写真28 国立先史学博物館（レゼジー）の展示（2）
47万5千年前から1万年前までの出土品がずらりと並ぶ「タイム・ライン」の長大なギャラリー